

暗闇を、 蹴散らかせ

鏡のような水面に木製の筏が浮かんでいる。エンジンの回転数が落ち、右に旋回し、フワリと筏に横付けする。底まで見えるのはいかというほど透き通った海。エンジンで切るとウミネコの鳴き声しか聞こえない。

素早く船と筏をロープでくくりつけると、四つん這いになって筏に乗り移る。筏には無数のロープが吊り下げられている。このロープを慎重に解いてクレーンで引き上げると、ゴツゴツした物体が水面から上がってきた。養殖牡蠣の塊だと言われなければ何だかわからない。途中重みに耐えきれず、いくつかの塊は海に落ちていった。ヒラヒラとなびく植物や、貝を覆う白やオレンジ色の生物、それ

に小さいエビやカニがもそもそと動いている。ドンドンドンドン、と鉈で牡蠣を叩いてロープから外していく。その牡蠣に付着した赤血貝を見つけると、ザクッと鉈で切り離して海水を張った小さなバケツの中に取り込む。数分前まで得体の知れない塊だったものが、佐々木友彦さん(48)の手によって牡蠣・赤血貝・ムール貝とそれ以外の付着生物に分別されていく。

壮絶人生の幕開け

友彦さんは丘での穏やかな雰囲気と反し、鉈を握ると眉根を寄せて険しい表情になる。こんな表情で向き合えばならぬほど、海

はずっと彼に厳しかった。

友彦さんは代々漁師の家に生まれた。幼少期は貧しく、カップラーメンと菓子パンで育った。父は普段は温厚な人だったが酒を飲むと荒れた。母は機織り持ちだった。家は落ち着ける場所ではなく、いつも腹を空かせていたので勉強にも集中できなかった。友彦さんが中学生の頃、伯父の死をきっかけに父は酒の飲み方が激しくなった。一升瓶を半分ぐらい一気に飲んでしまうようになり、酔えば親戚や世の中への恨み辛みが止まらなかった。親戚が集まると、金返せ、金よこせという会話が流れ聞こえてきた。「お前の親父に金貸した。親父の代わりにお

めが返せ」と友彦さんが直接言われることもあった。「この家の問題を解決するには何千万という金が必要だ。おらはおっさくなんねえといけね」と幼いながらに腹をくくった。

山田の海は恥ずかしい

高校卒業後上京して1年半、スーパーや運送会社、卸売市場などで働いた。そこで横浜の海を見て衝撃を受ける。「タバコのポイ捨ても立ちションもない。山田に戻ったらタバコの吸殻だらけだった」。帰郷後、漁師が海を守らなければいけないと、ひとりゴミ拾いを始める。父からは「変わったことをやるな」と怒られ、先輩からは「おめえ一人が拾ったつ

てどうにもなんねえ。おなごでも探せや」と揶揄された。争いを嫌う彼はただじっと我慢し、みんなが家に帰った後、隠れるようにゴミ拾いを続けた。

20代、岩手や宮城、三重、そしてオーストラリアといった牡蠣産地の先進地に積極的に視察に行く。牡蠣の質の高さに驚き、そこで見た養殖方法を取り入れていった。昔のやり方に固執する父とは幾度となく衝突したが、友彦さんは一歩も譲らなかつた。母には「おめの牡蠣は親父を超えた」と褒められるようになる。そして若干29歳にして、漁協の理事という大役にも挑戦、73歳の父に代わって事業主となる。

翻弄される漁師たち

そんなある日、凶報が飛び込んできた。父の弟である勝正(かずまさ)さんが自宅の倉庫で首を吊ったという知らせだった。幸い発見が早く、九死に一生を得た。ひとりの漁師がそこまで追い詰められた背景には、山田町の漁師が翻弄されてきた長い歴史があった。

山田湾は深い水深と狭い湾口、周囲に連なる山々のおかげで、波が穏やかで、江戸時代から天然の良港として重宝されてきた。今のように港の整備が進む前は、船が停泊できる港は限られていたため、必然的に一つひとつの港が多くの漁師を抱えるようになった。

11

月
7日

10°C



【岩手県山田町境田町】

文=成影 沙紀、高橋 博之 写真=玉村 廣延